

青年期の自立をめぐる家族機能とストレスの関連

—家族ライフサイクルの視点から—

GH081010 : 柳 川 朋 香

指導教員 : 石井宏祐講師

I 問題・目的

日本における自立とは他者との人間関係を基盤として発達するものと考えられている（福島，1993）。これまでの青年心理学における青年と家族の関わりは，二者関係を基に検討されてきた。近年，青年と家族の関わりを二者関係ではなく，家族成員それぞれが相互作用しあう，全体としてひとつのまとまりを持つ有機的なシステムとして見る家族システム論（尾形・宮下，2000）のもとで，家族全体の関係を捉えられており，そのための指標に家族機能がある。個人にも発達段階があるように，家族全体にも発達段階がある。特にステージとステージの移行期には家族システムの変化が強く求められるため，家族にとって最もストレスがかかる時期であるとされている。家族ライフサイクル論に基づくと，青年期の子どもがいる家族は“子どもの自立性と親の介入に関する家族ルールを的確に再規定する”という発達課題を持っている。

青年期の自立の研究は数多く見られるが，家族ライフサイクルの視点での家族の自立の研究はまだ少なく，家族メンバー間における自立の先行研究はほとんど見られない。よって，本研究では自立を個人内の発達課題として捉えるだけでなく，家族メンバー間の発達課題として捉えることを本研究の目的とする。また，先行研究で言われているような母親の自立に対する認知と，本研究で明らかにしていく子どもが捉えた母親の自立に対する認知が同じような認知であるならば，青年期の女性の心理的自立は促進されるのではないだろうか。

仮説1：青年期の女性にとって自立の獲得というのは，心理的自立の獲得に対して家族内ストレスを感じている

仮説2：青年期の女性にとって家族機能の適応性が低いよりも，適応性が高いほうが心理的自立は獲得されやすい

仮説3：子どもから捉える母親を感じる自立の認

知が高いと，心理的自立も獲得されやすい

II 方法

2009年10月下旬から12月上旬に，大学生1年生～4年生，専門学生（18歳～22歳）の女性を対象に質問紙法を実施した。質問紙構成は①家族機能測定尺度20項目②心理的自立尺度25項目③子どもの自立に対する母親の受容尺度④大学生用ストレス尺度の1因子である“家族ストレス”10項目⑤性別，年齢，家族構成，現在の住居形態である。

III 結果・考察

1 青年期女性の自立と家族内ストレス

心理的自立と家族内ストレスで対応のない t 検定をおこなった結果，責任ある対人関係の自立が低いと感じている場合に家族内ストレスを受けることがわかった ($t(338)=2.03, p<.05$)。よって仮説1は検証された結果となった。さらに，子どもから捉える母親を感じる自立の認知と家族内ストレスで対応のない t 検定をおこなった結果，母親からの放任意識 ($t(338)=5.58, p<.001$) と受容 ($t(338)=8.96, p<.001$) と信頼感 ($t(338)=5.18, p<.001$) が低いと感じている者が，家族内ストレスを強く感じており，母親からの過保護が高いと感じている者も家族内ストレスを強く感じているということがわかった ($t(338)=8.02, p<.001$)。このことから，青年期の女性にとって家族内ストレス軽減するためには，母親が自立についてどのように思っているかということが示唆された。

2 家族機能の適応性と心理的自立

家族機能の適応性と心理的自立で対応のない t 検定をおこなった結果，青年期の女性は家族機能の適応性が高いと感じると，心理的自立における責任ある対人関係 ($t(338)=4.37, p<.001$) と将来志向 ($t(300.75)=2.47, p<.05$) と自己統制 ($t(338)=3.34, p<.001$) の獲得が促進されるということがわかった。よって，仮説2は一部支持された結果となった。やはり家族のルールを柔軟に変化できる能力は，青年期の女性にとって心理的

自立を獲得する上で重要な要因の一つであるということがいえるのではないだろうか。

3 子どもから捉える母親が感じる自立の認知と心理的自立

子どもから捉える母親が感じる自立の認知尺度と心理的自立で対応のない t 検定をおこなった結果、責任ある対人関係は母親からの放任意識 ($t(338)=3.86, p<.001$) と受容 ($t(338)=4.24, p<.001$) が高く、信頼感 ($t(338)=2.64, p<.01$) が低いと感じていると獲得されやすく、将来志向は母親からの放任意識 ($t(338)=2.21, p<.05$) が高いと感じていると獲得されやすく、価値判断・実行は母親からの放任意識 ($t(338)=3.07, p<.01$) と受容 ($t(338)=3.08, p<.01$) と信頼感 ($t(338)=3.56, p<.001$) が高いと感じていると獲得されやすく、自己統制は母親からの受容 ($t(338)=1.97, p<.05$) と信頼感 ($t(338)=2.47, p<.05$) が高いと感じていると獲得されやすいということが明らかとなった。よって仮説3は支持される結果となった。母親の関わり方を青年期の女性である子どもは認知をしており、

それが結果的に自立の獲得へ繋がっていくため、母親がどのように自分の自立を感じているのかという視点が重要なものであるといえるだろう。青年期の女性にとって自分自身の自立というよりも、母親がどのように自分の自立を認知しているのかということが家族内ストレスと関係しているのかもしれない。家族のルールを柔軟に変化できる能力は、青年期の女性にとって心理的自立を獲得する上で重要な要因の一つであるということがいえる。母親の関わり方というものを青年期の女性である子どもは認知をしており、それが結果的に自立の獲得へ繋がっていくため、母親がどのように自分の自立を感じているのかという視点が重要なものであるといえるだろう。

<引用文献>

- 福島朋子. (1993): 「自立に関する概念的考察—青年・成人および女性を中心として—」 発達研究. 9. pp.73~pp.85
尾形和男・宮下一博. (2000): 「父親の協力的関わりと子どもの共感性および父親の自我同一性—家族機能も含めた検討」